

なぜ阪口博士は海洋政策にかかわることになったのか。そこにはいくつもの偶然があり、博士自ら「まるでルービックキューブ」と言うような、人生の転回点がありました。

(只木良枝)

その後オーストラリア連邦科学技術研究機構(CSIRO)、東京大学地震研究所を経て、海洋研究開発機構(JAMSTEC)に入りました。

Davos Next 2023への道



JAMSTECの観測船「なつしま」に乗船した際に無人潜水機ハイパードルフィンの前で

基調講演講師インタビュー②

(公財) 笹川平和財団海洋政策研究所所長

阪口秀博士

JOES Davos Next2023 基調講演

講師の阪口秀博士に聞く第二回。今回は、これまでの歩みと研究について、そしていま力を入れている海洋教育について、もう少し詳しくお話しいたできます。

前回、海洋政策にかかわられているとご紹介しました

もともと海洋政策の専門家だったわけではなく、粒状体力学やシミュレーション科学の研究をしていました。

神戸大学農学部の手助をしていましたが、阪神・淡路大震災(一九九五年)で自宅も大学の研究室も大きな被害を受けて、約一年間、避難所に住み込みで奉仕活動をしていました。

その後オーストラリア連邦科学技術研究機構(CSIRO)、東京大学地震研究所を経て、海洋研究開発機構(JAMSTEC)に入りました。

JAMSTECの海研究？

それまで海にほとんど縁がない研究でしたが、JAMSTECに来た以上は海の研究をしようと思いましたが。深海底での資源開発や二酸化炭素回収・貯留(CCS)など開発活動にかかわる構造物をつくる際に、必要となる施設や条件について、当時ほとんどなかった現場観測に挑みました。

観測機材の開発から始めたのですが、このとき海洋の現実に初めて触れました。たとえば、海底調査用の機材を海面から海底まで往復させる数時間で、ブランクトンや藻類に機材の表面が覆われて、観測値が狂ってしまうことがあります。陸上観測では、そうした生物付着はなかなか起きません。そのほか陸上では想像もできないことが海では次々に起こります。人間が何かをしてもひっくり返される海洋の現実に直面してから、物事を広く深く考えるようになりました。

専門外の研究者との協力は大事ですか

自分の専門といっても、それだ

けでは何も解決できない小さなもので、専門外の知見に耳を傾け、人々が協力することが重要です。ルービックキューブがクルクル回るようにいろいろやってきた過程で、さまざまな分野の人と知り合いました。いまは科学から少し離れて政策にかかわっています。海の問題に対処するときには、海のことだけでなく極力広く深く物事を考える必要があります。

海洋教育にも力を入れていらっしゃるって聞いています

二〇一六年から、日本全国の幼稚園から高校を対象に「海洋教育パイオニアスクールプログラム」という事業を実施しています。身近な海の生物観察や川を通じた海洋ゴミ防止活動、津波対策など、地域に見合ったテーマをとり入れた海の学びを支援しています。

この地域ごとの身近な海の学びは、これから海洋全体を自分事として考えていくうえでとても重要になります。海洋の課題を解決するために、日本の海の学びを世界に広めたいと考えています。